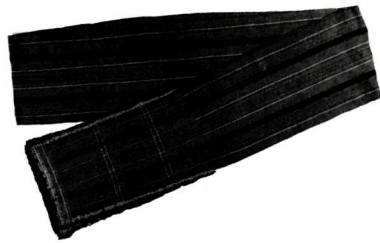




カントウの禪ふんどし

西本 太 (にしもと ふとし)

総合地球環境学研究所非常勤研究員



カントウの禪

建て替えの費用に

天理大学附属天理参考館で開催されていた企画展「モチノメの国ラオス」(民博・総合地球環境学研究所共催)に、ラオス南部の少数民族カントウの禪「ガン・チャレン」を展示してもらった。

禪といっても、関取の化粧回しのような装身具である。長さは約四・五メートルで、基調色の朱に、黒と黄の縦縞が織り込まれ、両裾にはたくさん鉛玉が縫い込まれている。精霊に水牛をささげる儀礼をおこなうとき、カントウの男たちはこれを着け、手に大刀と盾をもって「アンヌート(膝曲げ)」という振り付けて水牛の周りを踊る。鉛玉が鐘となり、踊り手が一歩踏み出すたびにズルズルと裾が引きずられる。そのかたちの変化が美しいという。儀礼に欠かせない衣装である。

四年ほど前、ある行きがかりから禪を日本へもち帰ることになった。現地調査をしていた村で、下宿先の大家が家を新築することになった。その費用の足しに、自分の甥から借り受けた禪を換金するというので、引取りを申し出たのである。

村では、毎年一〜三月の農閑期に五戸前後の家屋が新築される。この村は一九九六年に現在の場所に移ってきたが、移住直後のにわか普請のせいで、多くの家屋が傷んできていた。そのため、建て替えを希望する家がたくさんあったが、二、三年先まで待たされるのがふつうだった。普請は共同

事業であり、親族や姻族のあいだで資金や労力を融通し合ってはじめて成り立つから、互いの順番を調整し、少ない資源を集中させる必要があるのだ。それでも、各家の負担は決して小さくなかった。

元の持ち主へ

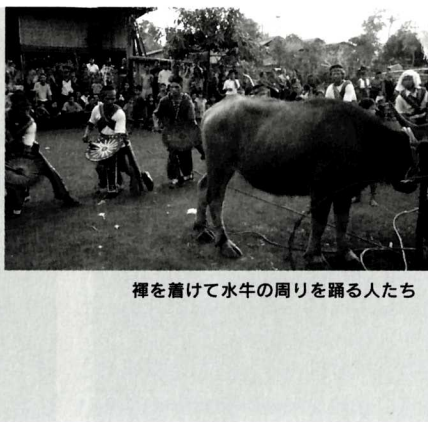
大家の甥も、今にも崩れそうな家屋に大家族で暮らしていて、かねて建て替えを希望していたが、まずは、おじたちの普請に最大限、協力する義務があった。そうすれば、いずれ自分の順番が回ってきたとき、彼らの援助を頼みにできる。彼の貧しい家財のなかで、この禪は虎の子だった。町の土産物屋に持ち込めば、結構な値段がつくが、手放してしまえばそれきりである。あれこれ考えをめぐらした末の決断だった。

物入りのたびに古民具が換金され、むかしをしのぶ「よすが」が失われていくが、村の人たちはそれほど感傷的でもない。むしろ親族間の助け合いのほうが、よほど確かなものとして頼みにされているように見える。そして、親族関係に参与し続けるには、少々強制的に見えなくもないが、この気前のよさこそが肝要なのだ。

禪の話も、大家が高いことをいうので最初、聞き流しかけたが、急に思い直して預かることにした。時間を十分おいて、元の持ち主にプレゼントしようと思う。彼は当時、日雇いの仕事をしながら、二人の子どもを町の学校に通わせていた。プレゼント



棟上の前に、現在の住居を担いで移動する



禪を着けて水牛の周りを踊る人たち

しても、また売りに出されるかもしれないが、成長した子どもたちが、これを着けて儀礼に参加する機会がきつと一度くらいはあるだろう。押入にしまい込んだまま、虫に食わせるわけにもいかず、今回、展示の機会をえたのは幸いだった。